『夜明けごろ、イエスは…』（ヨハネの福音書 21 章 1-14 節）2021.4.18.

＜はじめに＞

復活の舞台はエルサレムでしたが、ガリラヤにおいてもイエスが弟子たちに現れています。

Ⅰ　岸辺に立たれた(1-4)

①ティベリア湖畔(1-2)

ティベリア湖はガリラヤ湖の別称です。イエスは復活後に「わたしの兄弟たちに、ガリラヤに行くように言いなさい。そこでわたしに会えます」(マタイ 28:10)と言われ、それで弟子たちもガリラヤに向かいました。2 節の 7 名はみなガリラヤ出身、うち 4 名は漁師です。

②「私は漁に行く」(3)

ペテロがなぜこう言ったのでしょう。「人間を取る漁師にしてあげよう」(マタイ4:19)と招かれた主はよみがえられたとは言えど、常に共にはおられません。これからを考えるとき、彼にできることは漁しか思い当たらなかったのでしょう。しかし、何も獲れませんでした。

③夜明けごろ(4)

いつからイエスは湖畔におられたのでしょう。岸辺に立つ前に何かしておられたのでしょうか(9)。イエスは弟子たちがこの辺りに来ると分かっておられたようです。弟子たちはイエスに気づいていません。しかし、イエスは弟子たちを見つめておられました。

Ⅱ　呼び掛けられた(5-8)

①「食べる魚がありませんね」(5-6)

岸から声がかかりました。朝方まで漁をしていたからです。「舟の右側に網を打ちなさい」との声に彼らは素直に従うと、おびただしい魚がかかり、網を引き上げられません。望外の大漁に彼らは何を思っていたでしょう。

②「主だ」(7)

この状況に似た出来事がかつてありました(ルカ 5:1-11)。そこにもいた一人がペテロに「主だ」と叫びます。ペテロは上着をまとい、湖に飛び込んだのはどうしてでしょう。岸辺に立って、呼び掛けられた方が、主イエスだと気づいたのです。

③主に気付くとき

生活の中で、主がおられ、働いておられることに、私たちは気づくことがあるでしょうか。主とともに歩む中で経験してきたことも主は用いられ、私たちが主に目を向けるように呼び掛けられます。私たちの信仰が飛躍する瞬間です。

Ⅲ　招かれた(8-14)

①「何匹か持って来なさい」(8-11)

大漁の網を引いて舟も岸に戻りました。弟子たちは、主からどんな言葉を掛けられると思っていたでしょう。主は彼らの獲物も持って来るように言われ、網を引き上げると 153 匹の大魚が満ちていました。主は彼らの獲物を大切に扱われます。

②「さあ、朝の食事をしなさい」(12-14)

そこには炭火がおこされ、魚とパンもありました。誰が用意したものでしょう。夜通し働いた弟子たちに、主はまず食事を勧めます。パンと魚を分かち与えられる主の姿もかつて見た情景です(6:11 他)。弟子たちは食しながら、何を考えていたでしょう。

③あえて尋ねはしなかった

目の前におられる方が主イエスであることを、弟子たちは十分わかっていました。人々は復活の真偽を論じますが、私たちは信じています。主はよみがえられて今も生きておられると確信するのはどうしてですか。どんな出来事でそれを実感できましたか。

＜おわりに＞ よみがえられた主は、今も生きておられ、私たちをご覧になり、呼び掛け、御許に招かれています。主の姿を、御手の業を、その御声を、私たちの生活の中で見つけ、見続けるのが、信じる私たちです。(H.M.)